

江戸時代における動物の生命と人命

塚 本 学

-
- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 動物観の問題と江戸時代文献 | 4. 人倫意識と生類意識 |
| 2. 江戸住民の接触した動物 | むすびにかえて——以後への展望 |
| 3. 動物情報と人倫意識 | |
-

論文要旨

動物の生命とヒトの生命についての意識は、ヒト・動物関係のさまざまな局面と人間社会内部の諸関係とに依拠した。中国文明の大きな影響下にあった日本島上の住民の動物への目は、中国文献に規制されたところもあったが、中国大陸との動物相のちがいが、日本人の動物観とひいては人間観を、中国文明のそれと区別させるものにもなったはずである。江戸時代は、このような日本人の動物観を表現する文献資料に恵まれていて、こんにちの日本人の生命感覚にもつながるものをそこに探る可能性を示す。ここでは18世紀はじめぐらいまでを対象に、そのすがたを展望しようとする。

江戸住民は多様な動物との接触を経験したが、とくにそこでの人間至上の主張が、動物生命の人生への利用拡大の欲求を強め、動物体利用情報のひろがりや人生に有害と目された動物殺害の正当化とは、人倫意識とも結びついた。これにチェックをかけたのは、ヒト・動物を通じた生類意識であり、綱吉政権は、人倫意識に、動物に優越したヒトが動物を憐れむ責任を負わせることで、人倫・生類意識の結合をはかったが、それは憐れみをもたないヒトを殺害する論理ともなった。以後、動物を資源視する感覚の強化は、近代化過程でいっそうすすんだ。だが、綱吉政権のもとでの考え方は、動物の生死に直接かかわる経験を排除するものでもあり、この感覚は以後の日本人にも影響した。こんにち生類意識から学ぶにも、この点の反省意識が不可欠であろう。